

1. 教科として大切にしていること

三重大学教育学部附属中学校の英語科では、「社会の変化に対応できる生徒の育成」を研究テーマとし、教育活動を展開している。その中心となるのは、"Don't study English. Use it."という考え方である。この方針のもと、生徒及び教師は学校でしかできない体験として、毎回の授業で英語を用いる時間を重視し、対話を通じて社会とのつながりを深めている。既習事項と新出事項を何度も繰り返し使うことで定着を図り、「英語の使い方を学ぶのではなく、英語で何を学ぶのか」を大切にしている。具体的に以下3つのことに重点を置く。

（１）話すこと（やり取り）の充実

授業デザインの中核となるのが「話すこと（やり取り）」であり、全ての授業は英語だけで行われる。これは英語を使って自己表現をすることの難しさを生徒に認識させる重要なプロセスであり、自己調整力など英語の表現力以外の負荷も生徒に与えることができるからである。そしてそれこそが学習の契機となることが期待される。悔しい思いをすることもあるが、それを通じて生徒と教師、生徒と生徒同士がつながり、教室内に学び合いの関係が生まれる。特に、生徒同士のやり取り



りでは「相手に分かるように話す話者の責任」と「相手の話を理解しようと努める聞き手の責任」を意識させ、「失敗をしても構わない。伝わるまで頑張ろう」という雰囲気が教室の中に醸成されている。

中学生の英語学習では、中間指導が特に重要であり、生徒と教師が協働して授業を創造していく。例えば、生徒が“I go to a convenience store yesterday.”と述べた場合、教師は“Oh, you went to a convenience store. What did you buy there?”と返す。再び“I buy a coke.”と返答があれば、“Cool. You BOUGHT a coke. I’m talking a lot, so I’m thirsty. I want to drink it.”のように、教師が生徒の話す内容に興味を持ち、やり取りを続けていく。この繰り返しが生徒の英語表現の幅を広げることに繋がっている。さらに、生徒が陥りやすい一般的な誤りを全体で取り上げて、“You WENT to the convenience store yesterday.”と訂正フィードバックを行う。話が一段落してから行うこともあれば、話の途中に意味や内容の確認も含めて行うこともある。生徒の様子や教室内の雰囲気をしながら、最適なタイミングで中間指導を行うようにしている。

（２）ICTの効果的な活用

英語科では、英語とICTをツールとして知識及び技能の習得を進めている。ICTを活用することで時間と

距離の制限から解放され、生徒が自由に学習できる環境が整備される。例えば、Padlet を用いての情報共有、Kahoot! を使って楽しみながら内容を理解し、自分の考えを持ち、深める活動、Quizlet を用いて、自分のペースで語彙の補足学習を促すことなどがある。さらに、校内 SNS での成果物を共有することから発展し、YouTube や Instagram などを活用して、社会に発信するための準備を進めている。また、生成 AI を授業に取り入れ、学習における自己調整のパートナーとして活用することも検討している。



(3) Authentic Materials の精選

生徒の主体性を引き出すためには本物の教材 (Authentic Materials) を導入することが必要不可欠である。Authentic Materials と前述した ICT との相性は抜群であるため、より深く主体的な学びを促すことができる。実際に native speaker が話す動画や音声、英語で書かれた新聞記事や絵本などを教材として積極的に活用している。そうすることで語彙のインプットが豊かになり、接する語彙の数とバリエーションが広がることと、その語彙が文脈の中で生徒に提示されるため、結果として習得されやすいと考えているためである。パフォーマンス課題を設定する際にも、「目的・場面・状況」について常にその Authenticity に意識を向け工夫を凝らし、苦心している。中学校 1 年生時からこれらに触れることで生徒の英語表現の幅は大きく広がり、普段の生活の中で、日本語で話しているような内容を英語で自然に表現できるようになってきている。

パフォーマンス課題を設定する際にも、「目的・場面・状況」について常にその Authenticity に意識を向け工夫を凝らし、苦心している。中学校 1 年生時からこれらに触れることで生徒の英語表現の幅は大きく広がり、普段の生活の中で、日本語で話しているような内容を英語で自然に表現できるようになってきている。

2. 教科研究のあゆみ

2017 年・2018 年に改訂された学習指導要領では、「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力等」「学びに向かう力、人間性等」という 3 つの柱から構成される「資質・能力」を育てていくことが明記されている。それを受けて「社会の変化に対応できる生徒の育成」を研究主題とした第 29 次から本次研究に至るまでの本校全体の研究と英語科の研究を振り返る。

本校の研究テーマについて	研究テーマと英語科のかかわり
第 29 次研究テーマ 2017～2018 年度 社会の変化に対応できる生徒の育成 サブテーマ 対話的な学びを通じて資質・能力が伸びる授業	・「対話」を生徒の学びの中心に据え、パフォーマンス課題やルーブリック評価を用い、他者との対話による学び、自分自身との対話による学びによって資質・能力の育成を図った。 ・英語でのコミュニケーションに関わる言語活用の仕方に焦点を当て、資質・能力を育てる研究を行った。
第 30 次研究テーマ 2019～2020 年度 社会の変化に対応できる子どもの育成	・SDGs に関わるパフォーマンス課題の設定に重点を置き、生徒の資質・能力の育成を図った。 ・英語科での学びが、STEP や他教科等と連動し、

サブテーマ SDGs を核に資質・能力が伸びる取組をめざして	教科等横断的な学習内容となるための研究を行った。
-----------------------------------	--------------------------

本校英語科の研究は、それぞれの時代で求められる教育の方向性にもともなって変化し続けている。しかし前項で述べているように「英語の使い方を学ぶのではなく、英語で何を学ぶのか」について教師自身が問い続けることは、一貫して大切にされている。教科等横断的な学習内容や、ツールとしての ICT の活用などで、生徒にとって英語科での学びがより Authentic に、そして主体的・対話的で深い学びとなるために、常に教師自身が授業をアップデートすることが重要である。

3. 資質・能力の育成を図る手立て

(1) 8つの資質・能力と英語科

英語の授業で欠かせないペアワーク及びグループワークにおいて、与えられた課題を達成するために協力して取り組もうとする姿勢や、言いたいことを英語で表現し、会話を成り立たせようとする中で発揮される【**協働**】。やり取りをする相手によって、より伝わり易い英語表現を考える【**じっくり・いろいろ**】。プレゼンテーションなどのパフォーマンス課題において、どのようにすれば自分の思いや考えが伝わり易くなるかを考える【**根拠**】、【**アイディア**】と【**伝達・発信**】。さらに、自身の英語表現や学びをメタ認知し、より他者に伝わりやすくなるように工夫・調整をしたり、次に自分がすべきことを認識して学びを改善したりする【**振り返り**】。教科である以前にコミュニケーションツールとして英語を使用する際に、生徒たちは上記の資質・能力を発揮する必要がある。本校英語科では、全ての学年・学級・授業において英語を話す（やり取りする）機会を確保することで、それらを着実に育成することをねらう。



情報が溢れる現代において問題発見能力と批判的思考力は、教育目標を達成するために必要なものとして前端的に挙げられている。教科等横断的な視点で課題を設定し、生徒たちが社会のリアルな問題を発見【**問題発見**】し、批判的に考える力【**じっくり・いろいろ**】を養っている。ここでは、それぞれの生徒が自身の理解度やスキルの成長を自己調整するメタ認知のプロセスも重要となる。このプロセスの中で、生徒の意識や思考が変容し、より深い理解と【**問題解決**】能力へとつなげることが可能であると考え。

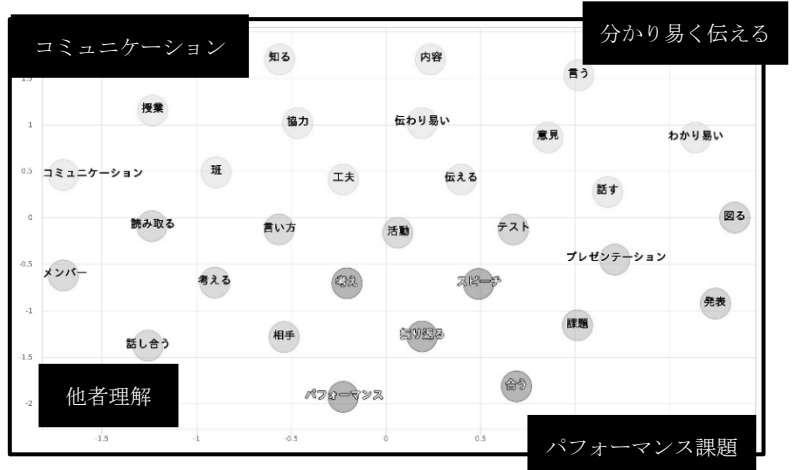
(2) STEP とのつながり

英語科の強みとして、日常のあらゆる物事を教材化できる点が挙げられる。そのため、STEP の導入で切り口とした「気候変動」および「防災・減災」について英語で学習することで、生徒たちは内容面としてのつながりを感じることができるであろう。

具体的に、2年生では英語をツールとして使用し、「防災・減災」について取り組んだ。身近なこと（学校の避難訓練など）から社会的なこと（通学路にある標識など）にまで視野を広げ、日本に住んでいる海外から来た人が災害発生時に何に困っているのかという動画を視聴し、SNS を通して世界中の人たちに知ってもらえるようにプレゼンテーションを課題とした。

また、生徒たちは STEP で研究活動に取り組むうえで、多くの調べ学習を経てエビデンスを確立する傾向がある。その際に、日本語の資料だけでは不十分なことも少なくない。海外のジャーナルや動画を参考資料として活用する場合に、英語科で培った力が生きていることは明白である。

英語科での学びを STEP に生かし、STEP での活動や経験をまた英語科の学びに生かすという往還的な学びが、生徒の資質・能力の育成を図れているものとする。



(3) 単元の評価規準

	知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む力
聞くこと	〈知識〉 出来事の経過を表す英語表現の文を理解している。 〈技能〉 物語の内容を聞き取る技能を身につけている。	人間と動物の絆を描いた物語を聞き、その概要を捉えている。	人間と動物の絆を描いた物語を聞き、その概要を捉えようとしている。
読むこと	〈知識〉 出来事の経過を表す英語表現の文を理解している。 〈技能〉 物語の内容を読み取る技能を身につけている。	人間と動物の絆を描いた物語を読み、その概要を捉えている。	人間と動物の絆を描いた物語を読み、その概要を捉えようとしている。
話すこと (やり取り)	〈知識〉 自分の気持ちや考えを表す英語表現を理解している。 〈技能〉 物語を読んで、自分の気持ちや考えを簡単な語句や文を用いて伝え合う技能を身につけている。	物語を読んで、自分の気持ちや考えを簡単な語句や文を用いて伝え合っている。	物語を読んで、自分の気持ちや考えを簡単な語句や文を用いて伝え合おうとしている。
話すこと (発表)	〈知識〉 物語の内容を小学生相手に伝える英語表現を理解している。 〈技能〉 物語を読んで、内容を整理し、小学生相手に物語の内容が伝わるように話す技能を身につけている。	物語を読んで、内容を整理し、小学生相手に物語の内容が伝わるように話している。	物語を読んで、内容を整理し、小学生相手に物語の内容が伝わるように話そうとしている。
書くこと	〈知識〉 自分の気持ちや考えを表す英語表現を理解している。 〈技能〉 物語を読んで、内容を整理し、小学生相手に物語の内容が伝わるように簡単な語句や文を用いて書く技能を身につけている。	物語を読んで、内容を整理し、小学生相手に物語の内容が伝わるように簡単な語句や文を用いて書いている。	物語を読んで、内容を整理し、小学生相手に物語の内容が伝わるように簡単な語句や文を用いて書こうとしている。

(4) STEP との関わり

①各教科としてのとらえ

教科書本文から自己表現につながる開かれた問いを生徒に出し、それに対する答えを共有しあうことで、一人ひとりの意見を尊重できるように指導していきたい。また本単元にかかわらず、英語の全ての単元を通して言えることであるが、英語の学習には必ず他者の存在が必要である。与えられた課題と一緒に取組み、乗り越えていくことを経験させたい。

②育成したい資質・能力について

英語科において重要な活動となるペアワークで、課題に対して自分の考えを英語で表現し、会話を成立させようとする中で【協働】する力の育成を、相手に自分の考えを英語で伝わるように考え工夫することで【伝達・発信】の能力の育成をそれぞれ図る。また題材を読み、深く考えることや相手の意見を聞き新しい考えに出会い、自身の考えを見つめなおすことで【じっくり】の資質も育成していきたい。

(5) 指導について

“Mistakes are OK!” これは英語の授業中に生徒から出てきた言葉である。外国語である英語を習得するにあたって、どうしても間違いは起こってしまう。その間違いが起こったときに、笑って茶化してしまうようなクラスなのか、そこから一緒に英語を学んでいくことができるクラスなのかによって、英語の学習には大きな差が出てくると思われる。生徒が素直に失敗を受け取れ、改善しながら全員で英語を学んでいくという一つの大きな目標に向かって進んでくれていることを嬉しく思っている。生徒の授業に対する姿勢を大切に、授業を進めていきたい。

毎時間、座席を替えて新しいペアとやり取りをさせている。そうすることで、誰と一緒にとっても学習に向かっていくことができるという土台を作っている。また、伝える相手を意識して英語を使わせるようにもしていきたい。本単元では、小学生を相手に物語を伝える活動をする。小学生が理解できる英語はどんなレベルなのか、どうすれば伝わるようになるのかを考え、より伝わりやすい方法で作品を作ることを目指していきたい。

(6) 指導と評価の計画

○「評価に用いる評価」 ●「学習改善につなげる評価」

時間	□ねらい ■学習活動	評価の観点			評価方法	育成したい 資質・能力
		知	思	態		
第1時	□物語のあらすじを思い出し、伝えることができる。 ■物語のあらすじを思い出し、英語で書く。 ■物語の前半部分を英語で聞き、読む。 ■物語の内容を理解するためのやり取りを行う。	●	●	●	●ライティング ●行動の観察 ●振り返り	【協】 【伝】
第2時	□一番印象に残った場面を伝えることができる。 ■物語の後半部分を英語で聞き、読む。 ■物語の内容を理解するためのやり取りを行う。 ■初めに自分が書いたあらすじを比べて気付いたことを共有する。	●	●	●	●行動の観察 ●振り返り	【協】 【伝】

	■一番印象に残った部分の絵を描き、理由とともに伝える。					
第3時 (本時)	□小学生に物語を伝えるために、どんな方法がい いか考えることができる。 ■物語のあらすじを確認する。 ■小学生にふさわしい伝え方を話し合っ て考える。 ■作品を作り始める。	●	●	●	●行動の観察 ●振り返り	【協】 【伝】
第4時	□小学生に物語を伝えるため、作品を作 ることができる。 ■同じ方向性の生徒でグループを作り、 作品を作る。	●	●	●	●行動の観察 ●振り返り	【協】 【じ】 【伝】
第5時	□できた作品をお互いに鑑賞し合い、よ りよいものにすることができる。 ■お互いの作品を鑑賞し合い、改善点 などのアドバイスをし合う。 ■アドバイスを参考に自分の作品をよ り良いものに作り直す。	○	○	○	○作品 ○行動の観察 ○振り返り	【協】 【じ】 【伝】

※育成したい資質・能力の表記は省略した名称で記述している。

根拠 ⇒ 【根】，じっくり・いろいろ ⇒ 【じ】， アイディア ⇒ 【ア】， 問題発見 ⇒ 【発】
問題解決 ⇒ 【解】， 振り返り ⇒ 【振】， 協働 ⇒ 【協】， 伝達・発信 ⇒ 【伝】

(7) 本時の指導 (第3時/全5時)

①目標

- ・物語を読んで、あらすじを伝えることができる。 [知識及び技能]
- ・物語を小学生に伝えるために、どんな方法が一番効果的か考え、作品を作ることができる。
[思考力、判断力、表現力等]

②指導計画 (50分)

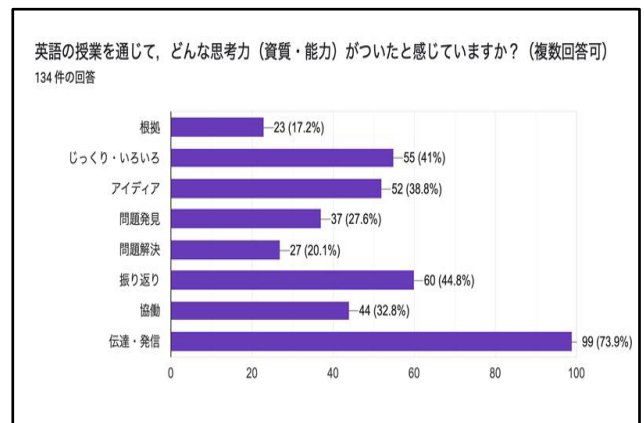
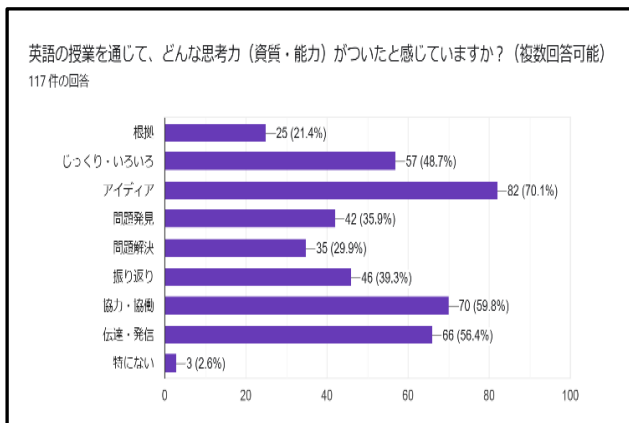
学習活動	○指導上の留意点 ◆評価	育成したい 資質・能力
1. Small Talk “Which do you like, comic books or animations?” 2. 物語のあらすじを復習する。 3. 物語のあらすじを全体で確認する。	○ペアでやり取りを複数回行う。 ○中間指導を適宜入れる。 ○英語を用いて、物語の概要を確認させる。 難しい場合には、物語を表すイラストを使 わせる。 ○絵を使いながら、物語のあらすじを全体で 確認していく。	

4. 本時の目標を共有する。		
【Today's Goal】 You can think of a good way to tell the story to elementary school students.		
5. どんな方法が小学生に伝わりやすいと思うかペアで伝え合う。	○ペアで英語を使って伝え合う。 ○できるだけ多くの方法を引き出したい。	【協】【伝】
6. 出てきた方法を全体で共有し、メリットやデメリットについて考える。	○必要なら具体例も示しながら、物語を伝える方法を確認する。もしアイデアが出てこなければ、こちらから提示していく。	
7. 自分で方法を決め、作品を作り始める。	○できなかった部分は家庭で取り組ませる。	
8. 振り返り	◆本時の振り返りをさせる。	

5. 成果と課題

昨年（令和4年）度2月に、生徒自身が英語科の授業でどの資質・能力の成長を実感したかを調査するため、2、3年生を対象にアンケートを実施した。

《質問1》英語の授業を通じて、どんな思考力（資質・能力）がついたと感じていますか。（複数回答可）



令和4年度 英語科授業アンケート結果（左3年生，右2年生）

さらに3年生に対しては、英語の授業に係る以下の質問紙調査を実施した。

《質問2》資質・能力に変容があった場合、授業のどのような活動や課題が影響を与えましたか。

3年生 117人回答		影響した活動や課題
1	アイデア 82人	- 教科書本文の内容を自分たちなりにアレンジし、人間関係が見えてくるように音読する活動。 - プレゼンテーションの準備をするのに、わかりやすい資料にするために工夫する活動。 - 伝えたいことがうまく表現できないときに、ジェスチャーやボディラングージを考えたとき。

2	協働 70 人	・授業開始直後に毎回あった Small Talk で、相手と会話が続くように協力する活動。 ・音読練習の時に、ペアの相手と目標を決めて一緒に頑張る活動。
3	伝達・発信 66 人	・プレゼンテーション（パフォーマンス課題）。 ・ALT の Dave 先生と会話する課題。
4	じっくり・ いろいろ 57 人	・自分の書いた英文のチェックだけではなく、班のメンバーの書いた英語をじっくり読む活動。 ・DeepL などの翻訳ソフトを使うときに、出てきた単語をそのまま使わずにじっくり考えるとき。

英語科として大切にしている「話すこと（やり取り）」の活動を通して、多くの生徒が自身の資質・能力に変容があったと感じている。また、パフォーマンス課題として提示したプレゼンテーションに関わる記述内容が最も多かった。**STEP** の取組で、自らの研究内容を発表する機会があったこととつなげて考えたからであろう。しかし、プレゼンテーションの「スキル面」についての記述に止まてはいない。発表を聴いてくれる人（他者）にとってわかりやすい発表となるように、生徒自身が資料やことばを精選したり、表現方法を考えたりできるようになったことは大きな成果であると言える。

「話すこと（やり取り）」を積極的に取り入れてきたことで、生徒は英語を使用して他者とコミュニケーションを取ることに抵抗がない。しかし、生徒は一生懸命に英語を学んでいるものの、その学びを実世界の状況に適用する機会が少ないのが現状である。（例：海外の学校との直接的な交流がない）実際に英語を話す機会を設けることは、生徒が異文化理解やコミュニケーションスキルを十分に鍛えることを促進させる。英語学習に対するモチベーションの向上および、英語運用能力の向上を図ることができるため、インドネシアの **Middle School** との交流を計画している。非英語ネイティブの生徒同士のやり取りから、英語学習に関するアイディアの共有や、それぞれの文化を紹介し合うことを目的としたものである。異文化に触れるだけでなく、自分たちの生活を振り返るとともに、資質・能力が表出する良い機会となることが期待できる。今後の学習に向けて、さらなる他者意識と広い視野が持てるよう支導していきたい。



〈参考文献〉

A 阿野幸一ほか(2022)：『これからの英語授業にひと工夫』，大修館書店。

KO 国立教育政策研究所教育課程センター(2020)：『「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料 中学校 外国語』，東洋館出版。

MO 文部科学省(2017)：『中学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説 外国語編』，開隆堂出版。

NA 中嶋洋一(2000)：『英語好きにする授業マネジメント』，明治図書。

NA 中田達也(2022)：『英語学習の科学』，研究社。

O 大塚勇三再話・赤塚末吉画(1976) :『スーホの白い馬』, 福音館書店.

SA 佐藤臨太郎ほか(2022) :『効果的英語授業の設計—理解・練習・繰り返しを重視して—』, 開拓社.

SA サラ・マーサーほか(2022) :『外国語学習者エンゲージメント』, アルク.

SI 白畑知彦ほか(2004) :『英語習得の「常識」「非常識」—第二言語習得研究からの検証』, 大修館書店.

SI 白畑知彦(2019) :『英語教育用語辞典第3版』, 大修館書店.

SU スター・サックシュタイン(2021) :『ピア・フィードバック』, 新評論.

YA 山岡大基ほか(2023) :『英語授業デザインマニュアル』, 大修館書店.